

「火付盗賊改」著者：高橋 義夫（たかはし よしお）

火付盗賊改といえば、池波正太郎の「鬼平犯科帳」と「雲切仁左衛門」のテレビドラマである。

主役は火付盗賊改の「長谷川平蔵」と「阿部式部」。雲切仁左衛門のシリーズでは、主役は「雲切仁左衛門」で火付盗賊改の「阿部式部」が敵役であるが、人情味のある人物に描かれている。

史実では、雲切仁左衛門は、甲州の出で子分は2名。二度目の盗みで捕えられ獄門の刑に処せられている。

火付盗賊改のはじまりは、家康の時代（1611年）、盗賊団の捕縛の命をうけた討伐隊に始まる。討伐隊は取り調べをすることなく、有無をいわず首を切ってさらしていた。暗いイメージで評判は良くなかった。

火付盗賊改の役割が整うのは享保以降（1716～）で、江戸市中から関八州までの見回りをする。役割は、火付、盗賊、博奕の3罪を取り締まり、犯人を捕らえて裁判をする。町奉行と火付盗賊改の所管をめぐる紛争は絶えなかった。また、火付盗賊改では、不透明な捜査手法、苛酷な取り調べがまかり通っていた。目明し、岡っ引きを使って怪しいものを捕らえ、白状しない場合は、拷問にかけて罪を認めさせ、白状すれば死罪、しなければ責め続けられ牢死をする凄惨な取り調べであった。無罪の者もあり、民衆からは嫌われ、恐れられていた。

目明し、岡っ引きとは、囚人の中から事情通を選び出し、同心たちの目鼻の代わりに使っていた。悪事をはたらくも多く、弊害も多いことから原則、使うことを禁止されていたが、火付盗賊改では伝統的な捜査手法として継続していたのである。

筆者は、名火付盗賊改として、中山勘解由(かげゆ)・長谷川平蔵、矢部定謙(さだのり)の3人をあげている。

■【中山勘解由直守】1633年～1687年（55歳）火付改：1683.1～1683.12（1年間）（別に盗賊改があった）

天和3年1月（1683）火付改に任命された。任務は前年大円寺の出火で市中の東半分を焼失した事件の放火犯の探索であったが、男伊達と呼ばれる乱暴者の江戸一掃に力を入れた。江戸中を騒がした男伊達を37人捕え刑場におくった。あの八百屋お七の火刑をおこなったのも勘解由であった。

その時代の評判で「御当代記」によると、短期間で成果もあげたが、お役お召し上げの噂が立つほど庶民に憎まれたのは、目明しの密告と拷問によって多くの冤罪を生んだことに原因があるとしている。火付改の役もその年の12月にお役御免となっている。

■【長谷川信以(ノブネ)(通称：平蔵)】1745年～1795年（50歳）火付盗賊改：1787年～1795年（8年間）

天明7年、天明の飢饉による打ちこわしが江戸市中で八千件もあった。町奉行では手に負えず、先手組10人に捕らえ方の命が下った。この先手組のなかに平蔵の名がある。与力75騎同心300人が現場に急行して取り押さえた。その年の9月に火付盗賊改に任ぜられている。役には、本役・助役・増役の3種があり、平蔵は助役だった。その後本役となっている。

平蔵が庶民の喝采を浴びるきっかけとなったのが、真刀徳次郎という名高い盗賊の捕物だった。御用提灯をふりかざして、強盗をはたらいていた。徳次郎は寛政元年(1798)獄門となった。入牢の時、大盗賊がその身なりでは、体裁が悪かろうと同情し着物を整えてやった。その他にも人情ある扱いが世情に伝わり、ますます評判が高くなった。

火付盗賊改長谷川平蔵の名が歴史に残るのは、人足寄場を創設した功績である。当時、無宿人が増加し、犯罪対策としても課題であった。そんな中、長谷川平蔵が「人足起立」と題した建議書を上伸した。人足寄場では、無宿人の作った製品や農産物を商人を介しての販売等、人足寄場の運営と無宿人の解消が目的。

寛政2年(1790)2月19日、老中の達書と書付が平蔵に下され、人足寄場創設が実行に移された。予算は削られていたため、3千両を御金蔵から借り出し、銭相場で儲けたお金を人足寄場の運営にあてたとしている。

■【矢部彦五郎定謙(サダノリ)】1789年～1842年（54歳）火付盗賊改：1828年～1831年（3年間）

定謙が、加役に任ぜられたころ、火付盗賊改や町奉行所の吟味方与力に博徒の親分が取り入り、賄賂でがんにがらめにして子分同然に使うという事態がおこり、知っていながら誰もが手を出せなかった。その親分を奇策を使って捕縛したのである。尋問は、町奉行の与力同心が賄賂を取っているため町奉行では吟味ができず、元書院番頭が訊問した結果、この一件に連座した与力同心はおよそ18人、切腹した者もあり、下獄した者もいた。

本件落着後、お役御免となり堺町奉行を3年間つとめ、天保4年大阪町奉行に転じた時、浜田藩の密貿易に家老が関係していることを調べ上げた。事件は定謙の手を離れ、元家老は出頭を拒み、切腹した旨によって浜田藩の関与は曖昧のままとなった。その時の御用番は水野忠邦であり、政治的な動きがあったようである。

その後天保7年（1836）勘定奉行となり、油問屋の買い占め問題を取り調べ、町方与力同心が賄賂を受け取っていることが判明し、勘定吟味方・普請役・武士商人53人が処分された。定謙は庶民には喝采されたが、敵を作ってしまった。天保12年（1841）町奉行のおり、水野忠邦をはじめとする重臣たちの不正を暴露した。その直後、町奉行の職を奪われ、定謙追放の陰謀に陥れられ、無実の罪を着せられ、抗議の意を示し絶食し、絶命した。内部の不正を暴くことは、難しく、正義ではあるが定謙は徹底的に不正を暴いたため葬られたのである。

火付盗賊改は、激務であり長生きをした人は少ない。長谷川平蔵などは、病気によるお役御免まで役目を務めたのである。悪評の中でも、上記の3人は優秀な火付盗賊改であった。